

Contents ▶

- 1 学内シンポジウム(2015.2.24)の概要報告 2 中村雅子教授発表要旨 3 山口有次教授発表要旨 4 森和代教授発表要旨
5 横山正子教授発表要旨 6 室岡一郎専任講師発表要旨 7 次回シンポジウムのご案内

1 学内シンポジウム(2015.2.24)の概要報告

さる2月24日に大学教育開発センター主催の学内シンポジウム「桜美林大学の教育の現状と課題—大学の将来を見据えて」を開催しました。今回のシンポジウムは、前回のシンポジウム(昨年2月)と同じく、本学の教育の現状認識と危機感を全学的な観点から組織横断的に共有すべく企画されたものでした。

パネリストは中村雅子教授(リベラルアーツ学群)、山口有次教授(ビジネスマネジメント学群)、森和代教授(健康福祉学群)、横山正子教授(芸術文化学群)、室岡一郎専任講師(基盤教育院)の先生方にお願ひしました。

2 中村雅子教授発表要旨:「学際性」「同僚性」と「学びの場」の構築 ~リベラルアーツ学群のFD活動から~

リベラルアーツ学群 教授 中村 雅子

リベラルアーツ学群(以下、LA)は文学部、経済学部、国際学部が統合し、新たに自然科学系の先生方を迎えて2007年に発足しました。LAのFD活動は、所属を異にしていた80名近くの教員が新学群の理念や目標を共有し、教育実践を模索しながら将来構想を含めて論ずる場となってきたと言えます。その際のキーワードは「学際性」と「同僚性」です。33専攻を擁するLA学群の教員の多様な専門性が、それぞれの研究や教育実践を豊かにするような同僚性を実現すること、それは、私たちが学生をまきこみ、その中で学生が育っていくようなLearning Community(「学びの場」、「学びの共同体」)を構築することに他なりません。

具体的には、LAのFD活動は、学生理解と授業実践を二本の柱として、さらに、改革を要する課題については将来構想委員会と二人三脚で進めてきました。毎年2月に全員参加を原則とするFD研修会を開催し、テーマを決めての講演や報告のほかに、6~8人の小グループのディスカッションを大切にしてきました。年に2~4回のFD研究会も開催していますが、教員が授業や委員会活動で多忙を極め、集まりにくくなっていること、同様に、教員と学生との自由な活動の条件がなくなりつつあることが大きな問題だと思っています。

LA学群のFDで最近大きな課題になっているのは、拡大しつつある(と思われる)学生の学力差にどう対応するかということです。その基本は、それぞれの学生に充実した学びの体験をさせることにしかないとはいいますが、私個人としては、学生が自分たちに感動し、自信をもてるような授業を(何回かは)したいと思っています。それは、例えば、「アメリカの文化」では、アメリカの50州をおぼえて白地図に書くこと、「教育思想」では、ルソーの『エミール』を岩波文庫の(上)(中)(下)読み通すことなどの、「やればできる課題」を設定することです。学生が「エーッ」と声を上げるような課題ほど、やり遂げたときの達成感が大きいことを実感しています。



3 山口有次教授発表要旨：「BM学群の将来を考える会」の取り組み

ビジネスマネジメント学群 教授 山口 有次

BM学群では、2014年7月に「BM学群の将来を考える会」を発足し、学群のあるべき姿を描き、その実現に向けた短期、中期、長期的な施策の基本方針を検討している。この組織は、BM学群教授会のワーキングチームと位置づけ、全教員で議論できる場を設け、参加は任意としている。そして、ここで策定した基本方針を、各委員会、そして教授会で議論し、学群として決定する体制をとっている。その検討範囲は、入試から、教育、研究、そして、就活支援や進学まで幅広い。特に留意しているのは、議論をつくり、実現可能な施策はできるだけ早期に実行に移すことである。また、他の大学のなかに埋没しないよう、学群の特長を出すことを強く意識している。



検討の初期段階には、前提として、文部科学省の方針、桜美林大学の基本方針、学則と学群ポリシー、入学志願者の状況、BM学群における現状の課題、変更不可条件などを確認し、他大学の参考事例把握も併せて行った。そして、昨年度だけで計11回、議論を積み重ねた。その結果、教育方針と特長の打ち出しポイントについて方向性を定め、学生像の長期展望と短期・中期的施策方針を整理した。特に、学生一人ひとりにあわせ、多様な学習機会を積極的に積み重ね、力をつけさせることに主眼を置き、当面の重点施策を抽出した。

昨年度は、26種類の職業を意識した学習ストーリーを作成し、授業改革の方向性整理と教員どうしの授業参観、高校生のビジネス・アイデアコンテスト、有志学群4年生による母校訪問プロジェクトを試行した。2015年度も、初年次教育科目「社会人基礎」のシラバス改善と共通パワーポイント作成、目標管理・達成度チェックに寄与する学生ポートフォリオ導入、理論と実践を融合した新たな実習科目の設置、学外広報強化のため学群オリジナルWebサイト刷新などを進めている。

今後は、BM学群の新たな中長期ビジョンを作成する方針である。

4 森和代教授発表要旨：健康福祉学群の現状と課題

健康福祉学群 教授 森 和代

健康福祉学群の特色

健康福祉学群は、健康と福祉に関する専門的な学びを目的として、社会福祉専修、精神保健福祉専修、健康科学専修、保育専修の4専修で構成されている。少子高齢化や女性の社会進出という社会の変化に伴い、福祉や健康に対する人々のニーズの拡大が背景にあり、存在意義が大きいといえる。

学びの特徴としては、各専修に特化した専門性を高める一方で、心の問題を含めた健康と福祉やその関連領域について幅広く学ぶ総合性を兼ね備えている。専門性の強化には、実習・演習が組み込まれており、実習支援センターに常駐している各専修の助手が、きめ細かく学生対応を行っている。また、対人援助専門職としての専門性を高め、かつ多様な職域でも重視されるコミュニケーション能力の養成も特徴としている。



健康福祉学群の現状

学生募集の推移には、2014年度にやや減少傾向がみられたものの、定員の4倍にあたる1000人以上の志願者を得ている。退学者数および学生相談室の相談件数は他学群に比して低い値を示しており、実習支援センターの学生支援の効果を示すと考えられる。

学生の学びへの姿勢をベネッセ基礎力調査の結果から概観すると、専門性を高め、資格取得という明確な目標を掲げて学ぶ学生が多いことが読み取れる。また、文章構成力を強化する必要を実感していることも示されている。進路では、医療・福祉分野が1/3以上を占めており、専門性を活かす志向性が高いことが明らかである。

健康福祉学群の課題

教育活動の課題としては、決められたカリキュラムをこなすのみでなく主体的に学びを深めるための働きかけが必要と考えられる。2014年度卒業論文を履修した学生は16名と1割未満であり、非常に残念である。学群FDでも主体的な学びの促進についてディスカッションを行った。また、専門領域のみでなく4年制大学の強みを活かした、幅広い柔軟な学びを促進するための働きかけが必要と言える。さらに卒業生の活動を把握しきれていないため、今後対策を検討し、在校生と卒業生をつなぐ幅広いネットワークの形成をめざしたい。そして資格のために必要な科目設置にカリキュラムが縛られているが、競合校との差別化が可能となるような独創性を推進することも課題といえる。

教育組織の課題としては、これまでも課題とされつつ、修正が困難であった4専修の教員配置ならびに学生数のバランスを調整することが必要といえる。そのための人事計画を入念に検討しなければならない。また教育活動の充実に貢献度の高い助手の処遇についても検討が必要といえる。さらに心理職の国家資格化の検討がはじまっているが、競合校の動きも考慮し、対人援助職としての心理職に対応する専修の立ち上げについても検討すべきではないかと考える。

5 横山正子教授発表要旨：プロフェッショナル・アーツの一翼を担う芸術教育 — 「芸術」に向かう若い心をどう受け止めるか

芸術文化学群 教授 横山 正子

昨今、音楽はネット配信を通して聴くのが普通になってきました。私たちは無料で配信される音楽をいつでも聴くことができます。ネット上には世界中のアマチュアが自分の演奏を投稿していますから、曲名で検索すれば演奏の良しあしを問わず耳に入ってきます。手軽さ、便利さが最優先され、耳に入るものをセレクトすることもなく、「芸術」といわれるもの、またそれに類するものに人がお金を使わなくなったとき、「芸術」が人に及ぼす力は逆に弱くなっていきます。このような時だからこそ、芸術を学び、良いものを世に伝える仕事は大きな意味を持ちます。芸術は人にとって必要欠くべからざるものだからです。芸術が消滅した世界は、想像するだに恐ろしいものとなるでしょう。芸術文化学群の教育は、技能や知識を学んで自分の人生を豊かにするだけでなく、良いものを世の中に配信し、意志的に伝えていく人間を育てることです。そのためには専門科目だけでなく、膨大な学びが必要となりますが、これは総合大学だからこそ可能なことです。自分の芸術への関心や能力を自覚し、自分にも何かできるのではないかと思う若い人は、桜美林に入って死ぬほど勉強していただきたいのです。教員はその能力を引き出し、夢につながる自信を持たせるよう、一人ひとりと向き合っていく行かなくてはなりません。総合文化学群時代からの卒業生を追跡すると、芸術の道を歩んでいる者の多いのに驚かされます。演劇、音楽、造形デザイン、映画にかかわる実に多種多様な分野で、粘り強く仕事を続けています。生活は安定しないかもしれませんが、しかし、国家や組織に頼らず自らの志で生きていく彼らは、桜美林という自由な気風に満ちた学園で学び、この学園の持つたくましさ、したたかさを確実に受け継いでいます。



6 室岡一郎専任講師発表要旨：基礎教育の良き変化のために

基盤教育院 専任講師 室岡 一郎

基盤教育院の役割は、大学での学びの基礎となり社会人の基礎力にもつながる知識や技能を身につけさせるとともに、建学の精神を体現した「桜美林大生らしさ」の土台を築くことにある。全学一年次の必修科目を管理するがゆえに新生生の質的变化に敏感であり、変化への柔軟な対応が求められる一方で、安易に揺るがせない基本的な「能力」や「理念」も存在する。社会や学生の変化も視野に入れつつ、なにを変えるべきか。なにを守るべきか。それを見きわめるには、まず、基盤教育院の教育活動とその課題を正しく共有しなければならない。

その方法の一つとして、2013年度末のFDでは、基盤教育院の科目の到達目標を



「…することができる」という形 (Can-do statement) で示し、それらを葉や枝に見立てた「基盤教育院の木」を作成した (OBIRIN TODAY 15号掲載の『「基盤教育院の木」をつくる—基盤教育院のFDの取組みと成果』を参照)。

日本語教育における「JFスタンダードの木」にヒントを得た試みであるが、到達目標を一本の木に組み上げることで、異なる科目に共通する問題、手薄になっていた領域なども視覚化され、明確な問題意識の共有が可能となった。たとえば、基礎学力、基本的学習スキル、自律的学習姿勢に科目共通の問題があることも改めて確認された。私の担当する「文章表現Ⅰ」においても、成績が上位と下位に二極化する、不自然な日本語の問題も含めてかなり文章力が低い、出席・課題提出・時間外学習・授業への積極的な参加に問題がある、といった印象が強まっている。

キャリア支援教育においてはCADACと連携した改革を進めている。一年次から三年次まで一貫性のあるカリキュラムを提供する、大学での学習目標が定まらない学生に一年次から継続的に将来を考える機会を用意する、基礎学力に問題のある学生の補習も含め早い時期から将来を見据えた学習に取り組ませる、といった主な改革目標を掲げ、2016年度からの新プログラム実施を目指している。

グローバルコミュニケーション学群の新設と並行して、いま、基礎教育が全学的に見直されようとしているが、「基盤教育院の木」が良き変化へと導く土台や指針となることを願っている。

7 次回シンポジウムのご案内

大学教育開発センター 公開シンポジウム

大学改革と教学マネジメント—教育理念を達成するために—

日 時 2015年9月17日(木) 14:00～16:00 **会 場** 桜美林大学 町田キャンパス 太平館 A202 教室

講 師 秦 敬治 (学校法人追手門学院 追手門学院大学 副学長 (教務領域及び学生領域担当))



国・公立大学には大学憲章等があり、私立大学には建学の精神といった大学の教育理念が存在する。

そして、各学部学科にはディプロマポリシーやカリキュラムポリシーが存在し、大学としての中長期目標・中期計画なども策定されている。そして、そこには学ぶ学生が存在し、社会にそれら学生は輩出されていく。

その際、学生や卒業生が身につけた能力 (知識・技術・態度等) は、大学の教育理念～学部学科のポリシー～、各授業やプログラムの到達目標と一貫性を担保しているのであろうか。また、大学のカリキュラム以外の取り組みも大学の教育理念や大学改革と一体感を持って進められているのであろうか? さらに、それら取り組みをマネジメントする体制はどのようなスタイルが

理想的なのであろうか。

多くの大学は、これらを分業的に行っており、一貫性や一体感など考慮されずに経営されているのではなかろうか。

そうであれば、何のために個別の大学は設立されたのであろうか。個別の大学が組織として存在する意義、それぞれの大学の理念や改革の必要性、教学マネジメントとは何か?

当日は、これらに焦点を当てて、皆さんと一緒に考えていきたい。

講師略歴: 西南学院大学の事務職員を経て、2006年より愛媛大学に教員として赴任、大学教育改革、学生支援、経営分析に関わる。2014年9月から追手門学院大学にて教学改革を中心に大学運営を担う。専門は、教育経営学、高等教育経営、大学職員論、リーダーシップ論など。

申込方法: 件名を「学内シンポジウム申込」とし、氏名・所属組織を明記して大学教育開発センター (fdcenter@obirin.ac.jp) までメールにてお申し込み下さい。なお、〆切は9月10日(木)とさせていただきますので、お早目にお申し込み下さい。

問合せ: 桜美林大学 大学教育開発センター E-mail: fdcenter@obirin.ac.jp

編集発行: 桜美林大学 大学教育開発センター

〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758 桜美林大学 其中館1階 101 TEL.042-797-2918 FAX.042-797-6398

E-mail: fdcenter@obirin.ac.jp Web: <http://www2.obirin.ac.jp/fdcenter/>